

令和5年度 峯ヶ塚古墳の発掘調査について

羽曳野市教育委員会
生涯学習部
文化財・世界遺産室

はじめに

峯ヶ塚古墳は、一般に立ち入ることができない陵墓の多い古市古墳群の中にありながらも、羽曳野市が発掘調査を行える数少ない前方後円墳のひとつです。

また、国の史跡でもあり、世界文化遺産「百舌鳥・古市古墳群」を構成している古墳でもあります。

築造当初の古墳の状況を調べるため、これまで19回におよぶ調査を行ってきました。

調査によって峯ヶ塚古墳は墳丘長96mを測り、内濠と外濠の二重の濠で囲まれている（外濠については、南側では存在が確認できていません）ことなどが分かっています。

また、墳丘は二段に築かれ、北側には、「造出し（つくりだし）」と呼ばれる壇状の出っ張りが取り付くことも確認されています。

「造出し」は古墳に葬られる人のために儀式を行った場所と考えられています。

今回はその「造出し」について調査を行いました。

今回の調査を行うまでのいきさつ

【造出しの発見】

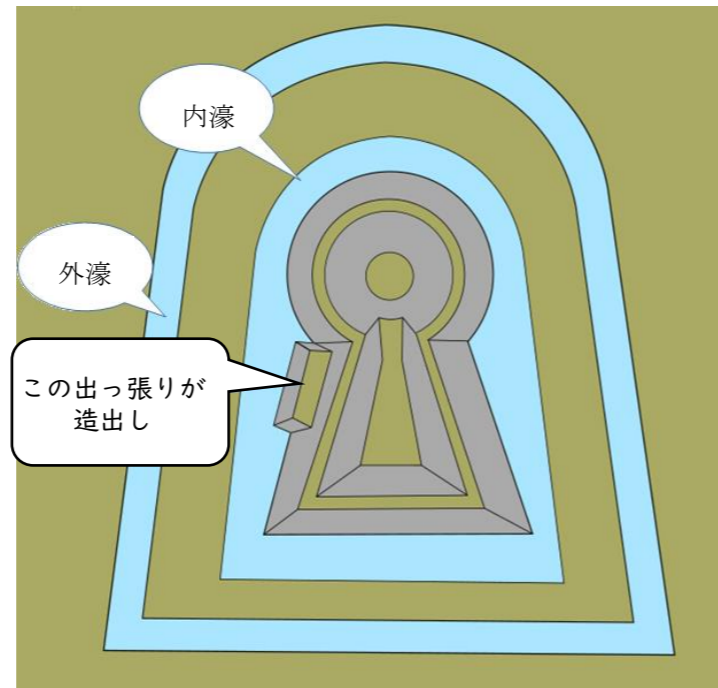
峯ヶ塚古墳に造出しがあることは、平成2年度の調査で初めて分かりました。

墳丘北側に造出しと考えられる壇状の高まりがあることが確認されましたが、調査範囲の都合上、造出しの大きさを確認することはできませんでした。

【造出しの大きさを確認】

この造出しの大きさを確認するために令和元年度から令和3年度にかけて、発掘調査を行いました。

その結果、墳丘の規模に比べてやや大きい、長さ約20mを測る大きさであることが分かりました。



前方後円墳模式図 (内濠・外濠・造出し)

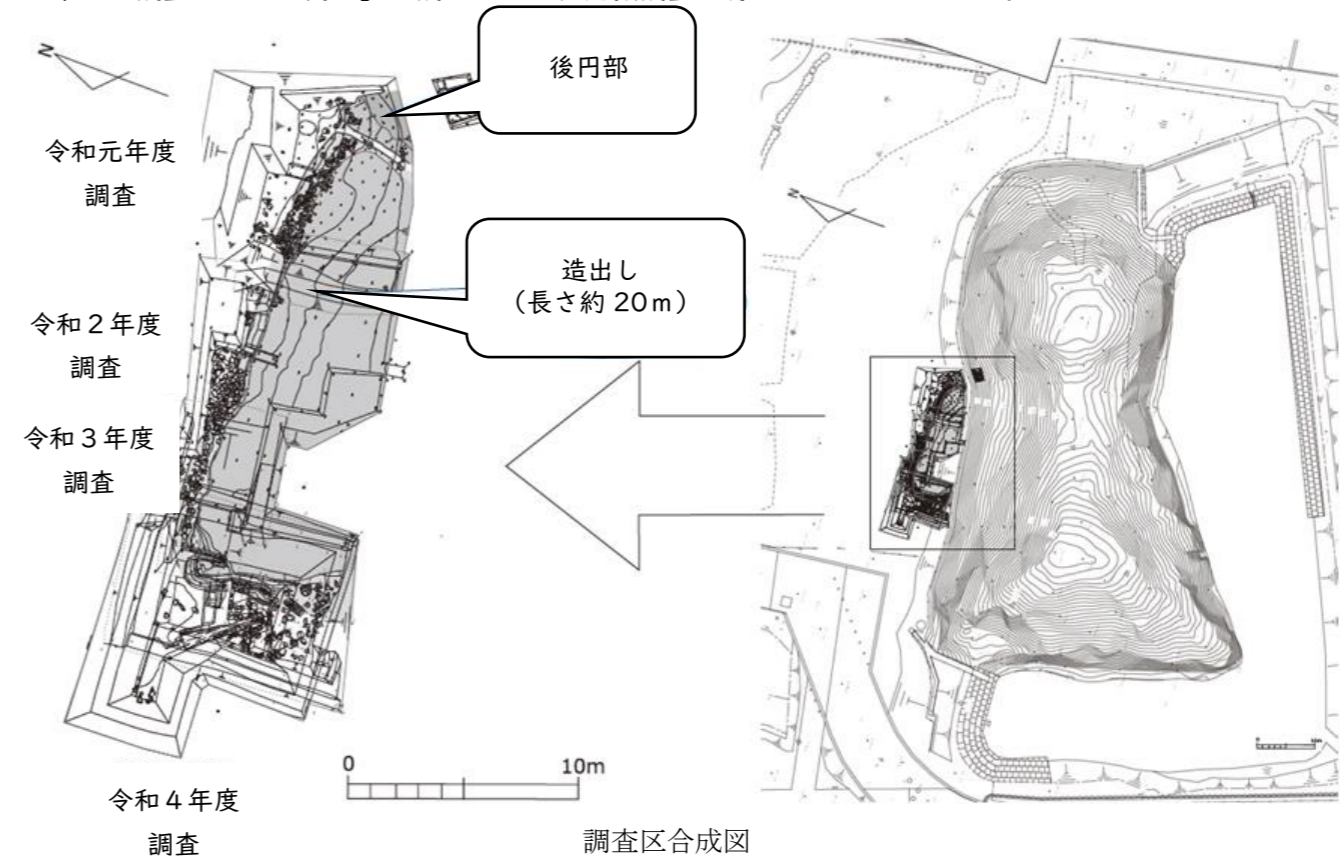
また、令和4年度にも造出し付近の発掘調査を行ったところ、内濠の中から日本最大のいわゆる「木のはにわ」が出土しました。

【造出しについて分かっていないこと】

造出しの大きさについては、これらの調査で分かりました。しかし、調査で確認した造出しは、上面が築造された後の時代に壊されており、残っていませんでした。

そのため、造出しの「高さ」についての情報が得られていませんでした。

今回の調査はその「高さ」を調べるため、発掘調査を行うこととなりました。



調査区合成図

今回の調査について

今回は、「造出しが墳丘のどの高さに取り付くか」を確認することを目的に調査を行いました。
墳丘北側の斜面に発掘調査区を2カ所設定して調査を実施しました。

1. 第1調査区について

第1調査区は墳丘の東側に幅約0.6m、長さ約9mの範囲で掘下げました。

【1段目テラスを確認】

調査区南端で円筒埴輪の底部付近がある程度形を保った状態で倒れていました。

この円筒埴輪を取り上げると調査区の壁断面において、別個体の円筒埴輪を確認しました。

これらから、この場所に円筒埴輪が並んでいたことが推測できます。

古墳のテラスには円筒埴輪を並べる例がおおく、この場所に1段目テラスがあったと思われます。

※「テラス」とは

墳丘は横から見ると階段状になっています。その階段状の部分のうち平たい部分を「テラス」と呼んでいます。

【墳丘にふかれていた葺石（ふきいし）を確認】

調査区中央付近で人頭大の葺石が墳丘の斜面にふかれた状態で確認されました。

築造当初の位置を保ったまま出土したものと考えられます。

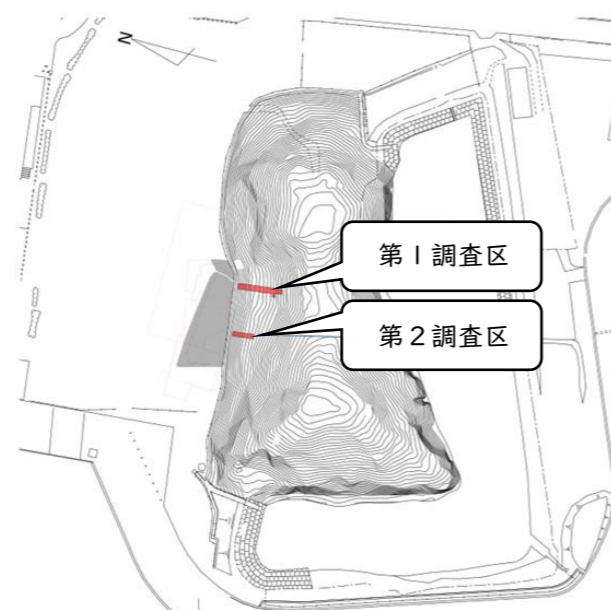
また、これまで峯ヶ塚古墳の墳丘には1段目テラスから墳頂にかけて一部分のみハチマキ状に葺石がふかれていたと考えられてきましたが、一段目斜面にも葺石がふかれていたことが判明しました。

※「葺石」とは

墳丘の表面に積まれた（ふかれた）石材のことをいいます。



前方後円墳模式図（今回の調査目的）



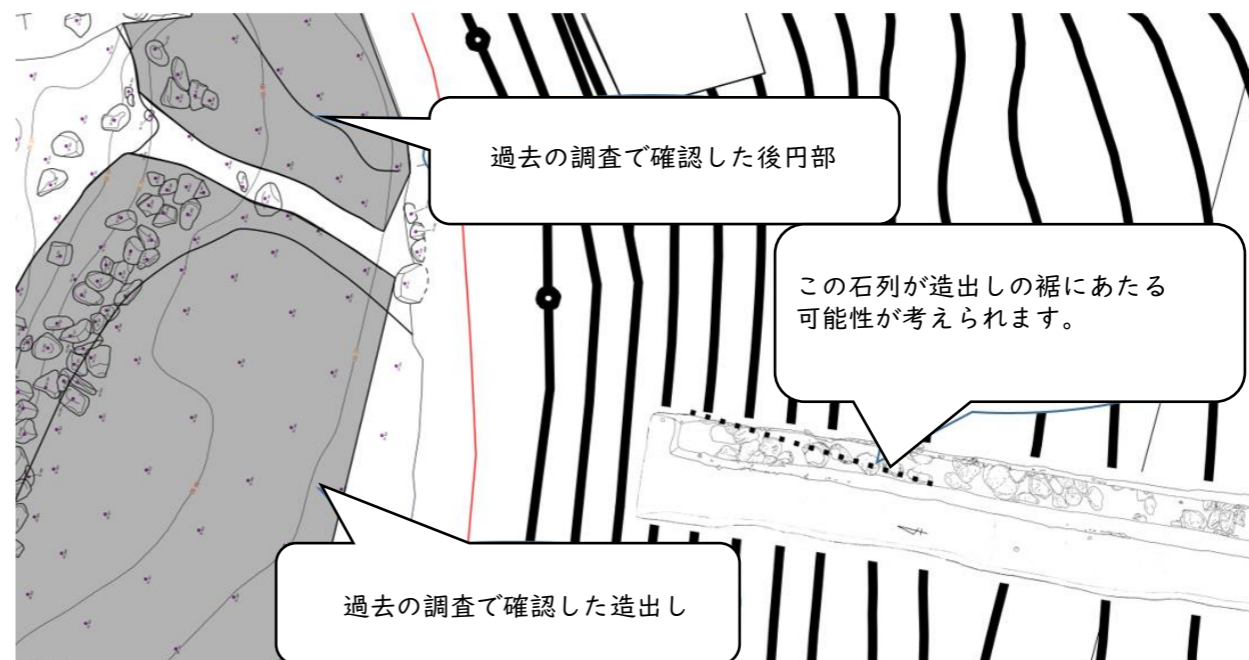
発掘調査区の設定位置

【第1調査区は後円部と造出しの間の「谷」か？】

調査区北側でも人頭大の石が直線的に並んで確認されました。

過去の調査で確認した造出しの東辺の延長上にあることから、造出しの端に設置していた石と考えていますが、調査範囲が狭いことから確定的ではありません。

少なくとも第1調査区は後円部と造出しの間にある「谷部分」にあたるかと考えています。



第1調査区と過去の調査区の合成図（左が北・縮尺不同）

2. 第2調査区について

第2調査区は墳丘の西側に幅約0.9m、長さ約4.5mの範囲で掘下げました。

【造出しの取り付けを確認】

調査区の断面で地層（土層）を確認したところ、墳丘の盛土が途中まで平たく、急に斜めに立ち上がります。

このことから、この「平たい」部分が本来の造出しの上面の痕跡を反映した状況と考えられます。

まとめ

今回の発掘調査によって、築造当初の峯ヶ塚古墳の情報を新たに得ることができました。

第1調査区では、「造出しが墳丘のどの高さに取り付くか」を確認するための調査でしたが、テラスや葺石といった思い掛けない成果が得られました。

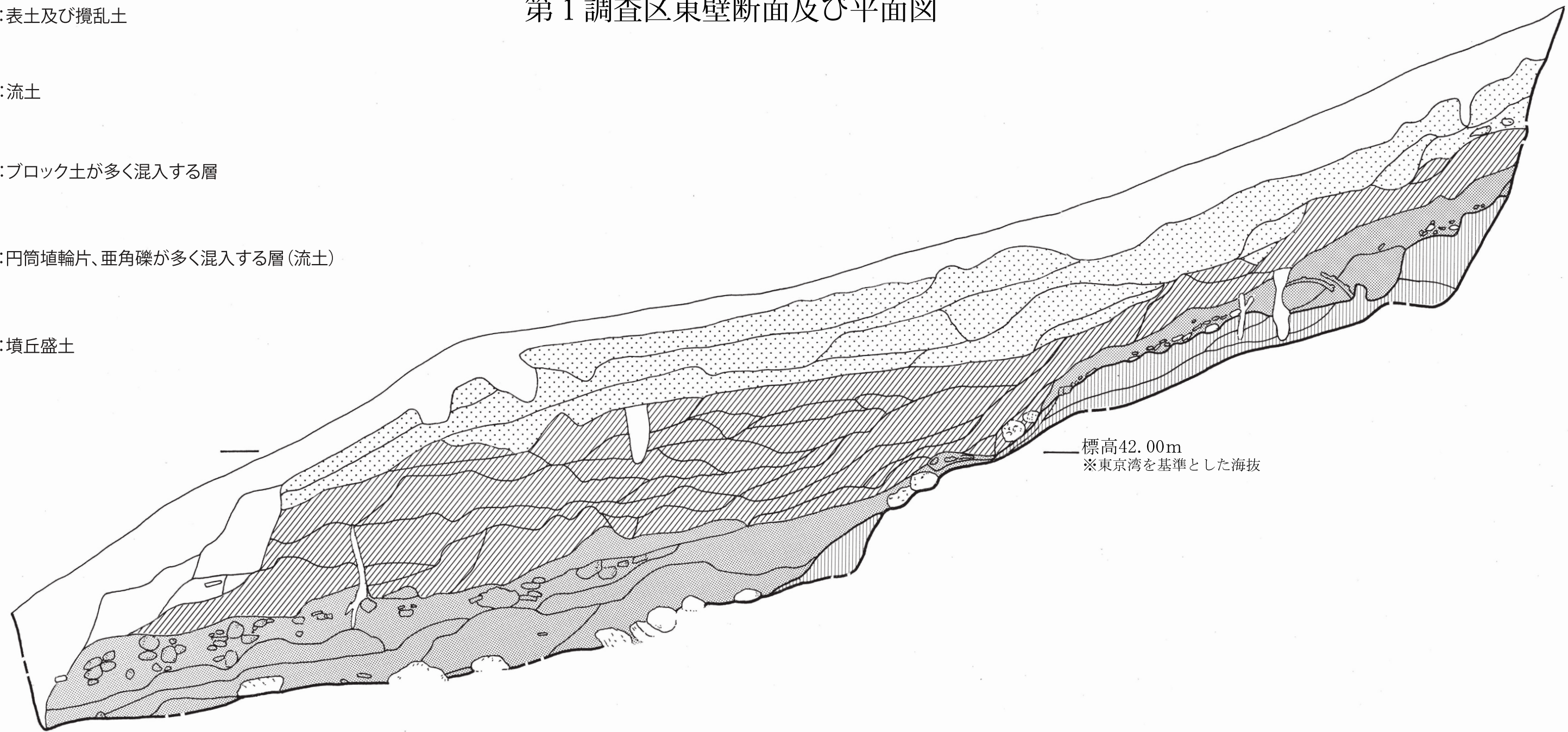
後円部と造出しの関係を復元するうえで重要な成果といえます。

第2調査区では、目的どおり造出しの高さと墳丘への取り付けについて、成果を得ることができました。これにより、以前は不明瞭だった造出し部分がクリアになり、墳丘を復元するための手掛かりを得ることができるようになりました。

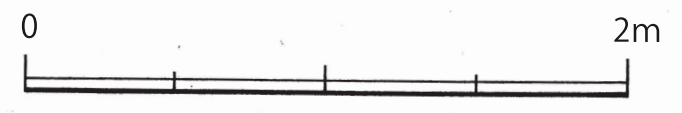
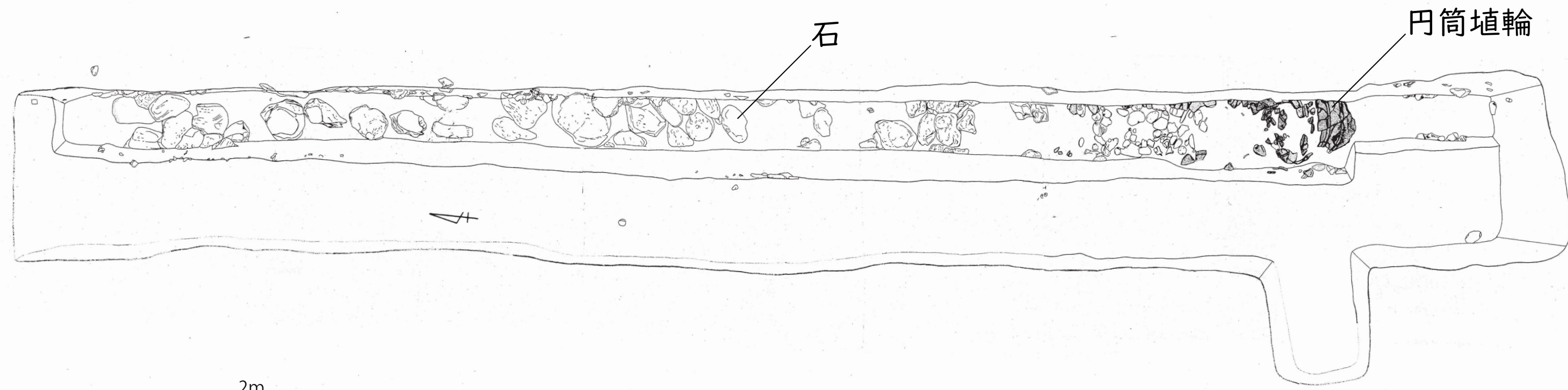
これからも築造当初の峯ヶ塚古墳を知るうえで必要な情報を集めてまいります。

第1調査区東壁断面及び平面図

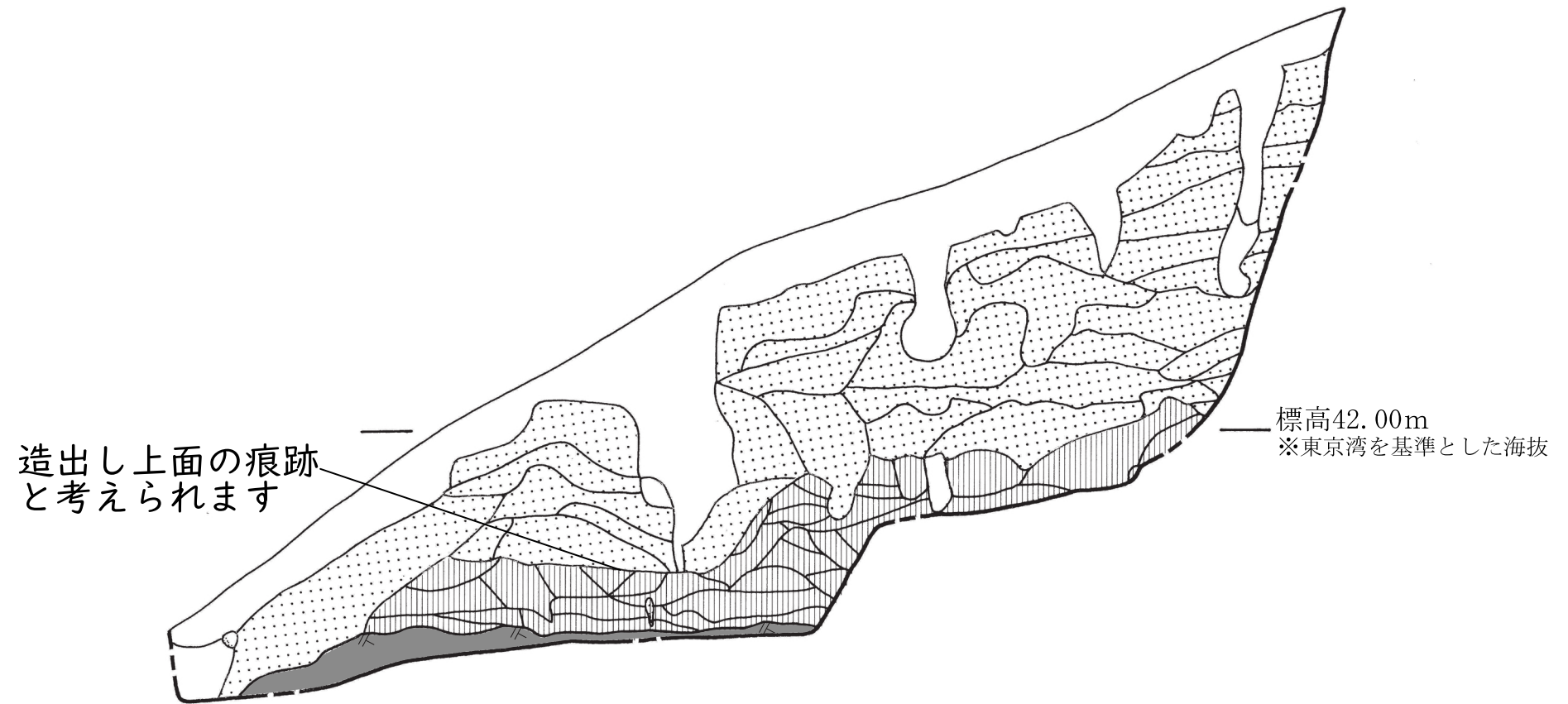
- ①: 表土及び攪乱土
- ②: 流土
- ③: ブロック土が多く混入する層
- ④: 円筒埴輪片、垂角礫が多く混入する層(流土)
- ⑤: 墳丘盛土



標高42.00m
※東京湾を基準とした海拔



第2調査区東壁断面及び平面図



①: 表土及び攪乱土

②: 流土

③: 墳丘盛土

④: 地山層

